

巻頭言

カレーの味は、どこでも同じか

新潟市立総合教育センター 所長 小林 圭一

ずいぶん前の話になるが、「指導案がうまく書けない」という若手教師の声が続いたのを受けて、新しい講座を立ち上げたことがある。

そこでは、一見とっつきにくく映る指導案づくりを、身近な経験に置き換えて説明した。



まず、こんな話をする。

設定は、「仕事を終えた帰り道、夕食のメニューを考えている教師の独り言」である。

「やっと終わった。夕食、何にしようかな。
今が旬の新ジャガが、まだ残ってたな。
今晚は親戚の子も遊びに来てるんだって。
疲れたし、手軽に作れるもので済ませよう」



「そうだ、カレーにしよう！
新ジャガたっぷりのお子様向けカレー!!」



「手順としては、まず材料を切って、豚肉を炒めたら、野菜と水を加えて煮込み、最後にルーを入れればいいんだよな」



「新ジャガのホクホク感を存分に味わうために、野菜は大き目にカットしよう」
「子ども向けに甘口のルーを使おう」



「最後に味見。新ジャガはホクホクしてるかな。子どもが食べれる辛さかな」

ここまで話して、「似たような経験ない？」と聞くと、皆、「ある、ある」という。

何となく作っていたように思えるカレーだが、出来上がるまでには筋の通った一連のストーリーがある。新ジャガがあるから野菜を大きく切るのだし、子どもがいるから甘口にするのだ。



次に、カレーづくりのストーリーの断片(A~E)を一般的な指導案の項目にはめ込んでみる。

すると両者は、きちんと正対する。

1 単元名	→ 「カレー」
2 単元の目標	→ B カレーの仕上がり具合
3 子どもの実態	→ A 食材・食べる者等の状況
4 指導の構想	→ D 本日の調理の工夫
5 指導計画	→ C 完成までの手順
6 本時	
7 評価	→ E 味見の観点

そもそも指導案とは、授業が出来上がるまでの一連のストーリーを分割・再構成したものだ。カレーづくりにもストーリーがあるのだから、こうなるのは、まあ当然だ。

このからくりが分かると、指導案づくりは、ずいぶん楽になる。何をどう書けばよいのか分からなくなったら、一旦カレーづくりに戻って置き換え、イメージし直せばいいのだから。



こんな昔話を思い出したのは、最近ちょっと気になっていたことがあるからだ。

それは、教師が指導案を説明する際、単元の目標については解説せず、単に「書いてある通りです」と済ませてしまうことだ。

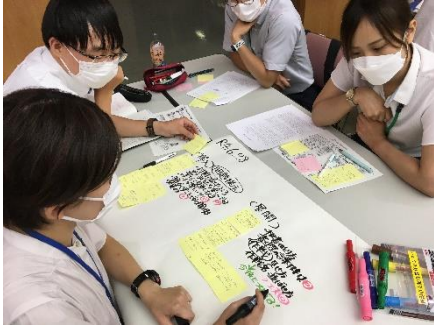
この背景には、「単元の目標は、日本全国どこでも同じ。あえて説明する必要なし」という考えがあるように思う。

これをカレーづくりに置き換えると、「カレーの仕上がりなど、日本全国どこでも同じ。あえて説明する必要なし」となるが、どうだろう。

同様に、「子どもの実態」が記されていない指導案も見られる。こちらは「食材や食べる者の状況が違っていても、カレーの仕上がりは結局同じ。あえて記す必要なし」といったところか。

働き方改革を進める上で、指導案は簡略化されるべきだ。ただし、「個別最適な学び」が求められる今、各校・各学級でつくられるカレーの味はそれぞれ違ってほしいものだ。

今年度の新潟市の新採用者（小学校・中学校・中等教育学校・高等学校・特別支援学校教諭及び養護教諭）は、およそ 180 名。そのうち、教員生活の記念すべき一年目を送る初任者の先生方 139 名が、校内・校外での初任者研修に取り組んでいます。5月から7月にかけては、総合教育センターが主管し、学習指導、生徒指導、特別支援教育についての研修が実施されています。



6月28日（火）には、小学校教諭の初任者を対象に、「授業の見方と協議会」についての研修が行われました。今号では、研修後にお聞きした2名の受講者の“フレッシュボイス”をお届けします。

【お聞きした内容】

- Q① 研修で特に印象に残ったことは何ですか？
- Q② 研修で学んだことをどう生かしていきたいですか？



そね けいた
曾根 圭太 教諭

内野小学校
4年生担任

Fresh Voice!

- ① 子どもたちにとって、よりよい授業にするために、「子どもがどう学んでいるか」を第一に考えることです。

視聴した授業動画では、教材提示や発表のさせ方など、すべてに教師の意図があり、子どもたちが学びやすくなる工夫が詰め込まれているということが分かりました。教師の細やかな工夫やこだわりが、子どもたちのよりよい学びにつながっているということ学びました。

- ② 授業動画では、教師が子どもたちの反応を全て把握し、子どもの反応に応じて働き掛けを考えていることに気がきました。私も教師として「授業をしている」と思っていたけれど、指導すべき学習内容や進度のことが気になり、子どものことを考えた授業ができていなかった気がします。

これからは、子どもを軸にして授業を考えていきたいです。そして、子どもの姿を通して授業を振り返り、日々、授業実践を積み重ねていきたいです。



にしわき ふたば
西脇 双葉 教諭

新津第三小学校
3年生担任

Fresh Voice!

- ① これまでは、授業の何を見てよいか分からず、校内の授業を参観しても、授業者の先生が何をしているかを見ていました。今、振り返ると、それぞれのクラスの空気感や一人一人の子どもの様子は様々で、そういった子どもの姿を見取ることが大事だったのだと気がきました。

自分の授業を振り返る時も、子どもの姿を通して、自分の手立てのどこがよくて、どこを改善すべきなのかが見えてくるのだと分かりました。

- ② 自分が授業をする時、「この活動をしなきゃ。その次はこの活動を…」というように、自分の考えた通りに授業を進めなければならないという気持ちが強かった気がします。

授業を進めるのに精一杯で、子どものことが見えていなかったのも、子どもの発言やつぶやきを拾うことがなかなかできませんでした。これからは、意識的に授業中の子どもの姿をよく見て、子どもの反応を生かした授業ができるようになりたいと思います。

「新潟市マイスターに訊く!」は、新潟市マイスターに認定されている先生方に、授業づくりについてのインタビューを実施し、その内容をご紹介しますシリーズです。日々の授業改善、授業力向上を図る上で貴重な示唆を得られること間違いなし! 授業の達人・マイスターの授業づくりのエッセンスをお届けします。



「マイスター一覧」は
こちらから

生活科 マイスター

かわぐち ゆみ こ

川口 由美子 校長 (東曽野木小学校)



Q 授業づくりで大切にしてきたこと・大切にしていることは何ですか?

子どもを主役にするからです。そのために、この単元、この授業の中で、子どものどのような姿が生まれるかを予想します。子どもの毎日の生活の中で、学習対象がどんなふうにいるかを考え、子どもが「どんなことを言うか」「どんなことをするか」「何を見ているか」などと、具体的な子どもの姿を細やかに思い描くのです。子どもの個性も考慮しながら、どの子にどの場面でスポットライトを当てるかも考えます。子ども主役の授業づくりには、子ども一人一人の多様な姿を具体的にイメージする力が欠かせません。

Q これまでの生活科の実践において、最も重視したことは何ですか?

「子ども発」の授業にすることです。「子ども発」の授業とは、子どもの様々な気付きを採り上げ、気付きをきっかけにして探究的に展開する授業です。子どもと対象との距離が縮まったとき、子どもは自ら動き出します。主体的に動き出した子どもが活動の中で見つけたものは、子どもにとって「本当のこと」です。自分たちが発見した「本当のこと」が価値付くことで、子どもはさらに学びを深めます。「この子たちには、どんな単元にしようか…」と考えることは、苦しくも楽しいものです。

Q 授業力向上を目指す若手教師へ伝えたいメッセージはどんなことですか?

新採用の頃に生活科と出会い、二校目で素晴らしい研究主任に育てていただきました。授業の腕を磨くことが特別ではない環境がありました。楽な道ではありませんでしたが、やっただけのフィードバックをいただきました。ぜひ、自分の軸となる教科を見付け、一步でも近付きたいと思う人を見付けてください。自分の中で完結せず、モデルを見付け、真似すればよいのです。そして、ぜひ、子どもを大事にする教師へ、子どもを大事にするとはどういうことかが分かる教師へと成長してほしいと願っています。

Q “これからのマイスター”に求められるものは何ですか?

時代が変わったとは言え、やはり、教科の専門性を備えているという自負をもって、学び続けることだと思います。つまり、マイスターになるということは、学び続ける覚悟をもつことです。そして、「あの先生のようにになりたい」と思われる憧れの存在、「この人に教をを請いたい」と求められる存在となることです。ただし、他の先生方にとって遠く離れた存在ではもったいないと思うのです。先生方の近くにいる魅力的な存在を目指すべきです。確かな授業力と人を引き付ける磁石のような人間的な魅力を兼ね備えた存在。それが、これからの時代に求められるマイスター像だと考えます。

特別活動 マイスター

のざわ さとし
野澤 諭史 教諭（鏡淵小学校）



Q 授業づくりで大切にしてきたこと・大切にしていることは何ですか？

1つ目は、「活動」を「学習活動」にすることです。活動自体を組織するだけではなく、子どもの「学び」がある「学習活動」として成り立たせるということです。そのために、育成したい資質・能力を明確にするとともに、目の前の子ども・学級がどのような必要感をもっているかを見極め、子どもの「今」をどう重ねるかという点を大切に授業を構想してきました。

2つ目は、「個」と「集団」のどちらも高めるとことです。特別活動というと、学級集団としての成長に意識が向かいがちですが、「集団」としての評価とともに、必ず、子ども一人一人にどんな変容があったか、どのような学びがあったのかという「個」の成長をしっかりと評価することを意識してきました。「個」の学びと「集団」での学びの往還が特別活動の特質であるというスタンスです。

Q 授業力向上のために、どのように取り組んでいけばよいですか？

とにかく、人に見てもらうことです。授業をたくさん公開し、参観してもらい、評価してもらいます。また、一回の研究授業よりも、日常の授業を複数回見てもらう方が授業力は向上すると考えます。その際、必ず、「今日はこういう授業にする」と決めて授業に臨むことが大切です。私自身も、授業の改善点を意識し、そこを視点に授業を振り返ることで、授業改善に努めてきました。

また、指導案作成にあたっては、誰が読んでも分かるように書くことを意識しました。マイスター養成塾を受講し、それまで自分がいかに独りよがりな指導案を書いてきたかということを感じました。授業と子どもに対する熱い思いは大切にしつつ、少し冷静になって、どんな読み手にも伝わる指導案になるよう心掛けました。これを意識するだけで、授業力向上につながっていくはずですが、自分の授業を自分の言葉で過不足なく表現できる力が、私たち教師、特にマイスターには求められていると考えます。

Q これまでの特別活動の実践における“ウリ”（ポイント）は何ですか？

学級担任として、学級目標を指導の軸に据えてきました。特別活動は、いわゆる「正解」がなく、むしろ、子どもたちが「正解」をつくり出す過程そのものと言えます。ただし、一人一人の思いや願いを大切にすることからと言って、「なんでもあり」では、集団としての成長は期待できません。そこで、子どもたちが「正解」をつくり出すための指針・規準として、学級目標が必要になると考えたのです。

また、子どもに自分や学級を客観視させることも重要と考え、手立てとして取り入れてきました。特別活動は、他教科に比べて感情や感覚、情緒などが活動の基盤になることが多いのですが、アンケート結果や子どもの様子の記録資料など、あえて動かしようのない客観的な事実を示し、学習課題への切実感を醸成することも、主体的な活動を生むポイントです。

新潟市マイスターって？

新潟市マイスターとは、「児童生徒に学ぶ喜び・楽しさを感じさせる授業実践を通して、他の模範となる優れた教師力を備え、市民感覚に富んだ教員」です。新潟市の教育向上の取組に参画しています。令和3年度末までに、123名がマイスターに認定されています。

今年度からは、マイスター連絡協議会の企画・運営により、マイスターによる授業公開「マイスターオープンクラス（MOC）」が始まります。マイスターの普段の授業から“気軽に”学ぶことのできる機会です。詳細は決まり次第、お知らせします。ご期待ください！



「マイスター
連絡協議会HP」は
こちらから